



TITLE:

英語も生きている！

AUTHOR(S):

林, 智昭

CITATION:

林, 智昭. 英語も生きている！. 京都大学アカデミックデイ2016: ポスター/展示 2016

ISSUE DATE:

2016-09-18

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216759>

RIGHT:

英語を題材に、言語変化の研究をしています！

1. 研究の背景

- ・前置詞 *during* (「～の間に」) は動詞 *dure* (「続く、耐える」という行動を表す) からできた。
- ・歴史をみると、元はフランス語 *durer*, ラテン語 *durare* という語に由来。
- ・動詞 *dure* は1882年を最後に使われなくなり、現代英語には存在しない。

言葉は、実は変化している！変化は、ゆっくりと進んでいく

- ・他に *concerning*, *regarding* (前置詞 *about* (「～について」) と同じ意味) などがある。
- 動詞らしさを失った前置詞「**動詞派生前置詞 (deverbal prepositions)**」と呼ばれる。

2. 二つの研究アプローチ

- ・本研究で、やるべきこと & 解決すべきこと:

- (i) 1つ1つの動詞派生前置詞ができあがったプロセス(歴史)は異なる。
- (ii) 動詞派生前置詞のふるまい、特徴の違いは？(今、どうなっている？)

「語彙→文法」という現象を研究し、言語変化の一端を解明していく！

上の (i) (ii) を調べるために、

- (i) **通時的研究**: その語が、歴史的にみてどのようにできあがったか？
→ 変化が起き始めたのはいつ頃か。いつ、前置詞になったのか。
- (ii) **共時的研究**: その語は、現代英語ではどうなっているのか？

- ・研究 (i) (ii) では、さまざまな英語のテキストを観察。
- ・また、研究 (ii) では、英語ネイティブスピーカーへの調査を行うことも。
→ 「自然で正しい英語だと思う」「いやいや、そんな英語聞いたことがないよ」など、回答によって現代英語で使われていそうな表現かどうか、がわかる。

3. 言語データ

- ・1990年代以降、コンピュータの発達により、電子データを大量に処理できるようになった。
- ・膨大なテキストデータは電子化され、**コーパス (Corpus)** という形で公開されている。
→ 現代英語、古い時代の英語、書き言葉、話し言葉など、目的によりさまざま。
- (例) COCA (Corpus of Contemporary American English): 約5.2億語の現代アメリカ英語。
BNC (British National Corpus): 約1億語の現代イギリス英語。
ARCHER Corpus: 1650年～1990年の約200万語のイギリス・アメリカ英語。
- ・英語の歴史的辞書を、研究に用いることもある(例文が豊富)
(例) OED (Oxford English Dictionary), MED (Middle English Dictionary) など。

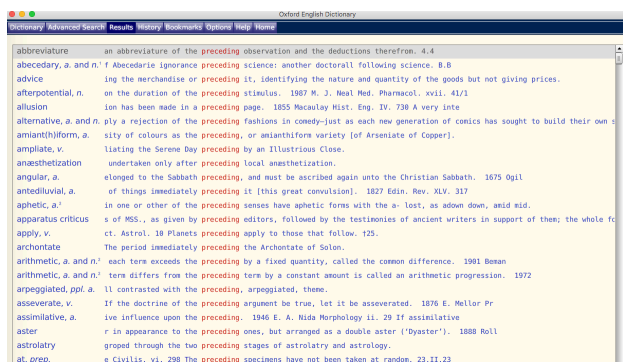
- ・研究 (i) では、コーパスが大活躍！
- ・コーパスは、ジャンル(話し言葉、書き言葉、フィクション、雑誌、新聞など、例文がどんな種類のテキストなのか)についての情報も収録！ → 研究 (ii) でも大活躍。

4. これまでにやってきた研究(の一部)

(i) 通時的研究

→OEDで、昔の英語を、調べてみよう！

・*excluding, preceding, barring*を調査。



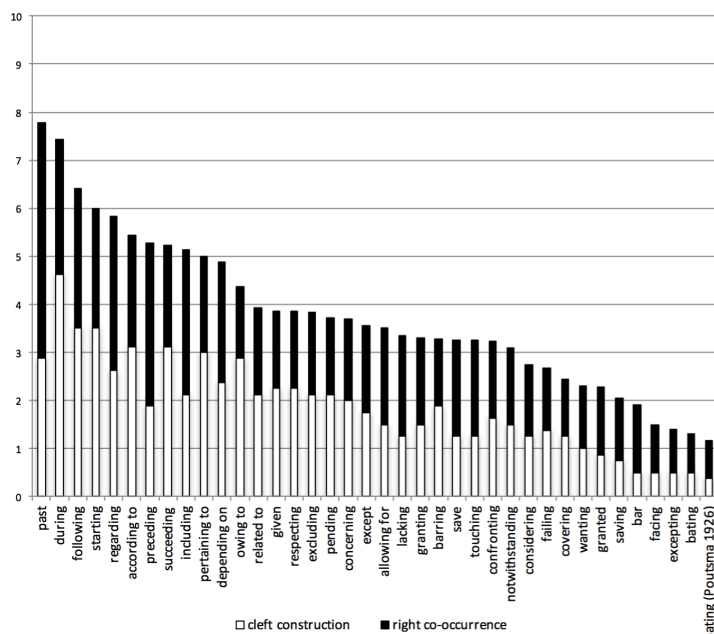
(例) *preceding/following*には、前置詞

*before/after*のような違いがある？

→先行研究によると、*following*は20世紀後半に前置詞化。一方、*preceding*は20世紀までに前置詞になっていない。

→コーパスで現代英語を見ると前置詞になりつつある。将来、前置詞になる？

(ii) 共時的研究→英語ネイティブへのアンケート



20世紀、消滅した*bating*はネイティブも知らない
動詞派生前置詞は、前置詞らしくない！

5. わかったこと

(i) 過去の英語を見ると、将来(これから)英語に起こりそうな変化が見えてくる。

(ii) 現代英語の中に、英語の歴史が見え隠れしている！

(動詞派生前置詞が書き言葉で使われやすい理由も、歴史を見ると...)

6. これから、やってみたいこと

【1】言語変化の研究としては：

(1) 動詞派生前置詞(未調査分)の記述研究

(2) 英語の歴史と、言語変化の関係を考察

→ノルマン征服直後(フランス語の言葉が流入)、中英語後期の前置詞の増加、などの影響は？

【2】言語変化の研究は、英語教育の役に立つ？

・大学生へのアンケート調査の結果「**英語も生きている**なんて、考えたことがなかった」

→学校では、現代英語のルールを教える。では、英語の歴史はヒントとなる？

cf. *polite* [ai] vs. *police* [i:] (後者は、16世紀の大母音推移後、フランス語から借用)

・英語の学習参考書(学参)には、明治・大正期に書かれたものが残っている。

(例)現代英語では滅多に使われない「**クジラ構文**」(*no more...than...*) など

→他に現代英語で使われていないものがあれば、学参の記述を修正する必要性

(例)実際の現代英語では*despite*が使われるが、日本人学習者は*in spite of*を使う傾向がある。

7. 参考文献(別紙)

※本研究は、科研費(特別研究員奨励費、研究課題番号: 15J00373)の助成を受けています。

参考文献

専門外の方々への「わかりやすさ」に焦点を置き、展示ポスターには出典情報を記載せず別紙にて配布しました。各節の内容に関わる参考文献は、発表者自身によるものも含め、以下に基づきます。出典の頁数など詳細な情報が必要な方、質問・コメントなどあれば、遠慮なく林 (hayashi@hi.h.kyoto-u.ac.jp) までお問い合わせ頂ければ幸いです。

1. 研究の背景

- 秋元実治. 2014. 『増補 文法化とイディオム化』 東京: ひつじ書房.
- Fukaya, Teruhiko. 1997. The Emergence of *-ing* Prepositions in English: A Corpus-Based Study. In Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita and Shuji Chiba (eds.), *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, 285–300. Tokyo: Taishukan.
- 川端朋広. 2001. 「英語における動詞派生接続詞の発達と文法化: *provided/providing* の接続詞用法」, 秋元実治 (編) 『文法化—研究と課題—』 97–119. 東京: 英潮社.
- 児馬修. 2001. 「周置前置詞 (接続詞) *save, saving* の文法化」, 秋元実治 (編) 『文法化—研究と課題—』 73–95. 東京: 英潮社.
- Kortmann, Bernd and Ekkehard König. 1992. Categorical Reanalysis: The Case of Deverbal Prepositions. *Linguistics* 30: 671–697.
- Trousdale, Graeme. 2013. *Gradualness in Language Change: A Constructional Perspective*. In Ramat, Anna Giacalone, Caterina Mauri and Piera Molinelli (eds.), *Synchrony and Diachrony: A Dynamic Interface*, 27–42. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

3. 言語データ

- Biber, Douglas, Susan Conrad and Randi Reppen. 1998. *Corpus Linguistics: Investigating Language Structure and Use*. Cambridge: Cambridge University Press. (斉藤俊雄・朝尾幸次郎・山崎俊次・新井洋一・梅咲敦子 (訳) 『コーパス言語学—言語構造と用法の研究—』, 南雲堂, 2003.)
- Hoffmann, Sebastian. 2004. Using the OED Quotations Database as a Corpus: A Linguistic Appraisal. *ICAME Journal* 28(4): 17–30.
<http://www.hit.uib.no/icame/ij28/hoffmann.pdf>
- Mair, Christian. 2004. Corpus Linguistics and Grammaticalisation Theory: Statistics, Frequencies, and Beyond. In Hans Lindquist and Christian Mair (eds.), *Corpus Approaches to Grammaticalization in English*, 121–150. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale. 2013. *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford: Oxford University Press.

※言語データについては、Traugott and Trousdale (2013: 40–43) を参照。他の文献では、コーパスの概説 (Biber *et al.* 1998) や、OED を用いた研究方法のメリット・デメリットが述べられている (Hoffman 2004, Mair 2004)。

4. これまでにやってきた研究（の一部）

- 林智昭. 2013. 「*excluding* の用法の歴史的変化—文法化の観点から—」『言語科学論集』19: 127–150. <http://dx.doi.org/10.14989/185118>
- 林智昭. 2015a. 「*preceding/following* の非対称性—文法化の観点から—」『日本英文学会第 87 回大会 Proceedings』245–246.
- Hayashi, Tomoaki. 2015. Prepositionalities of Deverbal Prepositions: Differences in Degree of Grammaticalization. *Papers in Linguistic Science* 21: 129–151. <http://dx.doi.org/10.14989/207859>
- 林智昭. 2016a. 「動詞派生前置詞 *barring* の通時的発達」『JELS』33: 10–16.
- Olofsson, Arne. 1990. A Particle Caught in the Act. On the Prepositional Use of *Following*. *Studia Neophilologia* 62: 23–35.

5. わかったこと

- Görlach, Manfred. 1991. *Introduction to Early Modern English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 林智昭. 2015b. 「*considering* の前置詞・接続詞用法の共時的研究—レジスターの観点から—」『日本語用論学会第 17 回大会発表論文集』10: 105–112.
- 林智昭. (in press) 「『除外』の意味を表す周縁的前置詞の用法の棲み分けに関して」『日本語用論学会第 18 回大会発表論文集』11.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

※林 (2015b, in press) では、動詞派生前置詞が書き言葉で使われる傾向があると論じた。

6. これから、やってみたいこと

- 林智昭. 2016b. 「文法指導への意味論的アプローチ: 言語変化の『文法化』を例に」『JACET Kansai Journal』18: 106–125.
- 菊地翔太. 2015. 「現代英語における譲歩を表す前置詞—英語史研究の英語教育への貢献—」『専修人文論集』97: 375–391. <http://id.nii.ac.jp/1015/00009385>
- 寺澤盾. 2008. 『英語の歴史』東京: 中公新書.
- 寺澤盾. 2015. 「変容する現代英語—英語史と英語教育の接点—」『関東英文学研究』8: 11–18.
- 八木克正. 2007. 『世界に通用しない英語—あなたの教室英語、大丈夫?—』東京: 開拓社.

※【2】は以下に基づく。これらの研究は、言語変化を扱う英語学研究が、どのような形で英語教育へと貢献できるかを論じたものである。林 (2016b) は、英語の授業において「言語変化」という見方を紹介した調査結果をまとめたもの。*polite* vs. *police* などの例については英語史を教育へと活かす試みである寺澤 (2015) を参照。八木 (2007: 2) は、「クジラの構文」など、現代の学習参考書などの問題点を英語研究者の立場から論じている。八木 (2007: 170–179) の提起に応える先駆的研究として、学習者コーパス (JEFL など) を用いた調査を行い、日本人英語学習者は現代英語における頻度の低い *in spite of* などを過剰使用し、前置詞の使用時には 20%以上の頻度で誤りを犯す傾向がある、と報告した菊地 (2015: 386) がある。